

三河アララギ

平成二十五年

新年号

第六十卷 第一号



ニューヨーク日記(75) <http://blueshoe.copetin.com/>

BlueCat, Shoe Lady

June 9, 2012 : Clouds at the Met

Blue Shoe Diaries



メトロポリタン美術館でアルゼンチン人アーティスト、Tomás Saraceno の作品が屋上で経験出来るよ。「クラウド・シティ」って言って要するにその雲の建物の中に入って登ったり景色を眺めたり、外からその雲を見て自分が写っている鏡が見えたり、って出来るようになってました。日本でも展覧会やってみたいけど観にいきましたか〜？

Visited “Cloud City” at the Met’s roof top after a walk in the park. It’s a structure by Argentine Artist, Tomás Saraceno. It was an interactive setup where you get to go into the “cloud” and be inside the cloud, look out from the cloud, look at the cloud from the outside showing you your reflection, etc. He’s done different renditions of this “Cloud City” in many cities throughout the world. Did you get to experience one?

目次

第六十卷第一号(通卷七〇九号)

表紙 たら	今泉 由利 (1)	朱に	白井 信昭 (27)
ニューヨーク日記(75)	Blue Shoe (2)	祝ひ	阿部 淑子 (28)
感銘歌 御津磯夫第十歌集	(4)	冬支度	富岡 和子 (28)
歌集「本の木」	杉浦 弘 (5)	「ことよせ」	いーはとぶ (29)
十三夜の月	岡本八千代 (6)	私の一首	金津 文枝 (30)
ねんねんぼう餅	今泉 由利 (7)		清澤 範子 (30)
自然の味	弓谷 久子 (8)		近藤 映子 (31)
木守柿	青木 玉枝 (9)		杉浦恵美子 (31)
みずずかる	内藤 志げ (10)	俳句	植村 公女 (32)
反抗期	安藤 和代 (11)		一石 (32)
雪の音	佐藤 喜仙 (12)		喜仙 (33)
秋の鶯	林 伊佐子 (13)		皓一 (33)
秋から冬へ	伊藤 忠男 (14)	「歴代天皇御製歌」(五)	貫名海屋資料館 (34)
日本晴れ	金津 文枝 (15)	子規の短歌革新とアララギの歌人(6)	佐藤 喜仙 (35)
期待	胃甲 節子 (16)	長塚節と中根岸養生院	夏目 勝弘 (36)
くやしむ	半田うめ子 (17)	贈呈誌	
月が丸いよ	清澤 範子 (18)	ある自然科学者の手記(8)	大橋 望彦 (38)
霜月	近藤 映子 (19)	絹の話(26)	今泉 雅勝 (40)
冬至	伊与田広子 (20)	物理学者と詩歌の世界(36)	今泉 一石 (42)
南吉全集	杉浦恵美子 (21)	短歌に詠まれた茂吉 1	鮫島 満 (44)
万両の朱	堀川 勝子 (22)	楽しい時間 2	山本紀久雄 (46)
猫	平松 裕子 (23)	「氷魚」のことから(144)	岡本八千代 (48)
さががき牛蒡	山口千恵子 (24)	ことのはスケッチ(409)	今泉 由利 (49)
三河弁	小野可南子 (25)	頌春	平松 温子 (52)
長塚節と中根岸養生院	夏目 勝弘 (26)	和菓子街道(75)	
えのころ草	秋山 逸穂 (27)	お知らせ・編集後記・三河アララギ規定	

感 銘 歌

御津磯夫第十歌集 「御津磯夫歌集」

微睡より醒めたる眼に引馬野の冬の至りの黒き蒼き空

P
12

日の昏れてふり出でし雨の音すなり匂ふは明日の大晦日の蒟蒻

P
14

歌集 「一本の木」

杉浦 弘

縁下の箒目あとを凹ませてなに待つといふ冬蟻地獄

財産を喰ひつぶし売り尽くして跡形もなくなる日近づく

田の畦に草まだ萌えずわづかなるみどり平たし野薊の葉は

十三夜の月

蒲郡 岡本八千代

よちよちに歩く曾孫の手をとりて今は黄葉もみぢの萩のかたはら

曾孫ひいの一步づつの危うさよわれの生活くらしもそれでよきかな

曾孫の小さな小さな靴一足わが家に置きて帰りゆきたり

帰りゆきてよちよち歩きがなほ浮かぶこの靴履きて転ぶすがたの

子猫の顔漫画模様の小さな靴わが手のひらにけふも載せて見る

一服の紅茶飲みつつしみじみと「文学は自由な天地」かを思ふ

月々に新しき十三夜巡りきぬ台湾の君らとのかの月夜の思ひ出

逢ひたしとおもふ人にも逢はずして速くも今宵は新しき十三夜

相共々仰ぎし西浦の十三夜去りゆき巡り来く十年目の十三夜

九日このかと四日よっかを合はせて十三夜今宵の輝きに何をか思はん

ねんねんぼう餅

東京 今泉由利

富士山はとても大きい近づきぬ朝昼晩の影と光と

朝の陽に輝^てる富士山と逆光のいぶし銀の暮るる富士山

二〇十二年最後の花の花々の花咲きてゐる私の部屋に

携帯の電話壊れしその故に私も壊るる秋の一日は

何に勝つ何に負けると知らぬまま地球の上のひとり人間

青空に青き煙のふはふはとねんねんぼう餅搗きてしをらむ

木星とオリオン星座とシリウスと親しくなりぬ一方的に

自の窓には見えぬ星々も映像として巡る巡れる

十三ヶ月かけて同じき位置に戻る惑星といふ赤い木星

地球より千三百倍も大きいとこの赤き星今宵見てゐる

自然の味と

豊川 弓 谷 久 子

真向ひに御堂山蒼しどこまでもこの道辿りて行きたくなりぬ

今夜よりぬくぬく眠らむ我が布団我が手に作る軽くて厚く

うれ柿を子と分け合ひぬこの味を母は好みき自然の味と

七歳のみさとが晴れ着で写りをり「あれから十年」我が一人言

銀河鉄道の世界か夜空に青白き光放ちて飛行船の浮く

けやき並木のこの道が好き枯葉舞ふこの季が好き風を見つめむ

姉も好みし絹の靴下五本指子が買ひ呉れぬ今よりはかむ

振り向かぬと決めし心のほころびて又悔ひてをり過ぎたる事を

庭に咲く石路の花も絵となりて八度目となる子の花の絵展

茶房の隅に佇ちて眺むる花の絵展花ひとすじに子は描きて来し

木守柿

新城 青木玉枝

汽車電車レールの続きも何時しかにおぼろとなりて山里に住む

山里に十ヶ月余りの独り居は吾への試練か人の世の運命さだめか

晩秋の光りに木守柿色づきてこの山里は柿すだれ見ゆ

山茶花の二花ふたはな三花なみはな咲き初めてあまた冬の到来を知る

雪降れば道は凍結二三日は杖持つ吾は無理だと言はるる

平成元年寿命五年と告げられて覚悟はしたのに二十四年生く

山並は霧がかかりて流れゆく芦の葉群も枯原となり

飯田線どんこう列車の車窓より刈田の彼方の山は煙りて

暮早き師走をむかへこの冬の寒さ思ひつ悔ゆる日びなり

何もせず日びの時間はゆるやかに流れていつしか老い深みゆく

みすずかる

豊川 内藤 志げ

みすずかる信濃の奥の一茶の里一茶の童謡口づさみつつ

白馬村リストエレベーターにてジャンプ台観光バスはミニカーのごとし

みせしめがスキーのジャンプの初まりと如何にも高し白馬ジャンプ台

夫の背に「私の分までお願い」と戸隠神社の石段の下

入り乱る太きコスモス引き抜くを「未だ早いよ」と妹の声

霜月の二十日に初花わがダチュラ顔近づけて香りたのしむ

西風に沙羅の紅葉さらさらと残り少なき一葉ようの散る

十月の日誌の締めに青葱のハモグリ多しと書き添へてをく

暗き空まんまる丸き満月を独り占めしてヨガ教室に

一株のみぞはぎ畑の土手に咲く淡きもも色見ればたのしも

反抗期

豊川 安藤 和代

窓に見る稲田はすでに刈り取られ案山子一つが片向きて立つ

柿の実の熟れし畠のその上に祭り花火の響き広ぐる

風評を悩む一筆添へられて盛岡の友からりんごの届く

人は皆「よい御主人ね」と言ふけれど頑固さのあり午後を語らず

反抗期の孫の笑顔の多くなりシクラメンの紅ひときは赤し

群雀かしまし相談終りたか飛び去り鉄塔淋しくなりぬ

その昔悲恋に別れた橋ゆゑに「涙橋」とふ知りて悲しむ

孫の作る花柄湯のみに熱き茶を注ぎふうわり幸せいっぱい

孫や子をかかえてしかと根を張れる里芋の如吾も生きたし

けふの雨やさしく降れよ昨日蒔きし蒨草の種小さきゆゑ

雪の音

東京 佐藤喜仙

薄き雲今宵の月の面を流る一管の音の澄みてとよもす

残照に影深まりぬ芒の秀近江の城址湖の中

見上ぐれば赤き石榴の実のあまた青空汚すごとくに感ず

しなやかに忍び来たるや冬気配楯火にかざす佳人の手美し

産土は行きかねる地と今はなる三八度国境の山

立冬を聞きこの町に霧の濃く通勤者あまたヌート出で来る

打ちつける破堤の波のくだくれば冬月の影いづこに消えぬ

冬の夜の袖に絡まる宿灯し冷気がたちて百骸にひびく

共通の問題解けず外見れば遠嶺白く冬日にありぬ

霜月の硫黄の匂ふ湯の町にしんしんと降る雪の音幽か

秋の鶯

岡崎 林 伊 佐 子

秋の陽は早く沈みて夕焼けの紅あけのみなぎる西方の空

コスモスの花蜜すいに鶯の今日二十羽の一団が遊ぶ

声もなく花蜜をすう鶯は珍客と思ふ草取る畑に

杖つきて山坂のぼり散歩する落ち葉はわが先ころがりてゆく

坂のある山に出でゆく日の出前ひものある靴きつく結べり

柿まつか木に残されて熟しゆく老いのみが住むわがふる里に

ひもすがら手作業をする農魂を楽しみながら老いて健やか

藁を焼く煙立ちこむ峡の道むかしの農は藁を焼かざり

わが畑は有機栽培雑草をひけば蚯蚓の太きがあらわる

秋から冬へ

大阪 伊藤忠男

花柄の姿が消える列車内着る物厚き晩秋の頃

秋晴れも冬を告げるか青空に雲が流るる北風に乗り

地下鉄の座席狭まり冬を知る厚着の人の増えしこの頃

秋がなく夏から冬への急ぎ足辛き試練を老いるこの身に

コート襟立てて落ち葉を踏みしめる乗り切る冬は心がけなり

友の待つ体育館へはあと僅か額汗ばむ冬の公園

息切れも乱れた足も今の今我の歩みし我の姿か

ラケットの届く距離しか手が出ない昔の動き懐かしきかな

思い切り身体動かし疲れても帰る小道は爽やかな道

昔なら意識せずして動きしも今はこの目で追えぬ速さに

日本晴れ

島根 金津 文枝

十一月二十五日日本晴れ敷布洗濯し飛行機雲棚引く

隣家の細田さん大根蕪キャベツ葱上手に育て洗いくださる

とりたての大根水々し直ちに煮れば味良く旨し

次男の中学校車窓より見ゆ三十余年無事日出度く退職す

福祉学生五人来て我が家の窓硝子拭き賑やかに茶話会馳走し

福祉の茶話会月毎に生徒五人学校卒業写真に収まる

タクシーバス列車エレベータータクシーに乗り変え九十一才の墓参り

調布より盆と正月に帰省二区は太る長男の料理

お寺より百年祭の法事知らせ戒名に依り料金が異ると

平成二十四年五月斉藤茂吉歌集記念号に歌出詠出来た

期待

豊橋 胃 甲 節 子

花数の少なき季節お隣も我家も裏庭石路の花

事も無く新しき年の初日の出吾が窓に拝する朝への期待

草刈機の音して丈なす枯草を今日は刈るらしホットしてゐる

葉の落つる吉野桜に次々と返り花咲く楽しみ見あぐ

辛うじて生かさるる身は穏やかに穏やかに黙し空を仰ぎぬ

満水の牟呂用水は澄み渡り流れは優しく心を洗ふ

デパートや商店街の人混みや賑はひ恋ほし籠れる吾は

お茶の花甘く匂ひて楚楚と咲く一花一花落ちて気付きぬ

眠れざる夜べの苦悩も胸内に収めて今朝も普通の時間に

育てるは初めてなれば桜草可憐に花咲く嬉しがらせて

くやしむ

新城 半田うめ子

しばらくを会へぬなりてわが友の事故に会ひしを知りてくやしむ

野さいを時々頂きしわが友よ永眠したり電車事故なり

働くを楽しみ居りきやさしさの友ともに会へぬ淋しかりけり

わが友は息子さんの嫁やさしいと語りつつ川辺を散歩したりき

赤飯を作りて吾にもち来たるやさしき咲様次男との生活

孫へとの洋服ふくを大切にのこに残し置き盗られたりきわが友のさき様

前畑の草深き中ころがりて南瓜の成り居り時折食むなり

楽しみつつ重雄先生より頂きし赤き玉ねぎ今も残りゐるなり

前畑に柿の木二本鈴成りの柿に鳴きつつからすとすずめ

月が丸いよ

春日井 清澤 範子

休日の娘を待ちて美容院へ短かくカット娘も吾も

夕暮れて夫が雨戸を締める時月が丸いよと吾にひと言

低気圧通り過ぎたり満開の木犀の花吹き散らしゆく

木犀の花のおしまひ星型の散りじり落つるを掃き寄するなり

秋風に冷たさ加わる日の続き二割引きなるセーターを買ふ

稲刈りが終りひこばえ芽ぶくなか吾が足音にすずめ飛び立つ

重心がよろけぬやうにしつかりと自転車に乗るスーパへの道

香嵐溪のライトアップに映し出す秋の色濃い今日の新聞

故郷の足助紅葉の香嵐溪県の事務所にて八年勤めぬ

この冬を健康に暮さむ体調もよし今日インフルエンザの予防注射

霜 月

名古屋 近藤 映子

わが夫の命の灯ともしびあとわずか医者いしやの言葉のにくらしき
家に居て何をするにもふと浮ぶ夫の顔なり今日の顔
娘よりの我夫の顔ケータイの写真を見ればわれの安心
神無月末ともなれば亀二匹夕方の冷えにガラス戸たたたく
わが夫の命の灯後わずかと医者いしやの言葉は吾に重苦し
風邪引きて夫の見舞ひの出来もせず家にてジット臥せをり
少しだけ鏡を見つつ化粧のまね口紅つけるその瞬間を
口紅の威力と以前同級生の言葉を今や思ひ出しつつ
わが夫の入院継続手続日決りて受ける知らせにホットする
見降しの川面にくつきり三日月の写りてをりぬ日暮前

冬至

豊橋 伊与田広子

ハリケーンサンデイの被害大きなり東海地震心配となる

わが居間を照らしながらに日は沈む弱き光を居間の奥まで

冬至には居間の中心に沈み行く今少しづつせばまりて行く

飛鳥あすかの旅夢に終りぬ心友のキャンセルせしにわれもキャンセル

刈谷駅降りれば階廊続きをり下にはバスや車行き交ふ

幼きに母に連れられ来たりしは明治用水その奥なりき

用水に枝垂れ柳のたれ下り夏は涼しそ住みたく思ひき

母住みし居間より見ゆる三河線玄関出づれば明治用水

母住みし家のありしどの様になっているか知りたく思ふ

日の落ちて行くことあきらめ帰るなり又来て探さむと思ひながらに

南吉全集

蒲郡 杉浦恵美子

声立てて笑ひし後は虚しかりたつたひとりの深夜のテレビ

三巻の南吉全集戴けり好きかと問はれてはいと応へば

背表紙はすっかり日に焼け読み取れぬ南吉全集我が手に到る

知り合ひのまた知り合ひよりもたらさる南吉全集愛しく読みぬ

我が夫の少年時代を思ひみる南吉童話の世界と似るか

南吉の古本に引かれ知多半田晩秋一日ちよつと旅人

萩を萩と間違ひたりし南吉の中学生日記少しかわゆし

南吉を読み終りたる晩秋の予定なき朝の狐の嫁入り

夫のぬぬこの世を見てゐるこの眼鏡夫亡き後に求めたるもの

夫のぬぬこの世にひとり生きてゐる二引く一は一ではないが

万両の朱

豊川 堀川 勝子

軒先の物干し竿に狭きまで干し柿吊るすまた冬が来る

ほっかりと浮かぶ夕日に曝されて軒に干し柿ひんやり熟す

夕焼けの色に萎えゆく柿すだれいよいよ色濃く秋深みゆく

虫喰ひの跡はあれどもいとほしく今年の大豆を筵に広ぐ

採算を思はず迷はず励み来て今年の大豆大豊作なり

田を持たぬ吾に高嶺の稲藁を下さると言ふ一反歩ほど

乾き居る田ひびきますに跪ひざまずき搔かき寄よする稈わらにまみれて心は豊か

稲藁に紛れる落穂捨てがたくミレーの「晩鐘」想ひて拾ふ

万両の朱の実付けしが枇杷の葉の落葉を厚くうち敷く下に

万両の朱の実幾本愛らしく迎春用にと網にて囲ふ

猫

豊川 平松 裕子

果てむとす小さき命に温かき毛布を掛けて我は出て来ぬ

拾はれて東京より来し猫二匹を我は厭ひて部屋より出さざりき

猫ごときにと言へばたちまち怒る子に任す他なしリュウタ委ねる

口の端にはつかはつかに水をやる尽きゆく命を子は止めむと

体の向き体温保持など細細と我に言ひおき子は帰りゆく

弱々しき命に一夜付き添ひて諦らめることの易きを思ふ

声かくれば猫リュウタは目にて我を追ふ回復の兆しがただただ嬉し

閉ぢてゐし眼を開けるそれだけを二人の子らに知らせてゐたり

四五歩歩き倒れる猫のリュウタを抱き上げて骨髄なる背をなでてやる

病院の待合室に会ひし人同じ猫ですねと話しかける

ささがき牛蒡

豊川 山口千恵子

庖丁にやや不揃ひに削りゐるささがき牛蒡の香りの中に

具の最後にササガキゴボウをのせ入るる夕餉の飯の炊き込み御飯

未だ細き大根一本抜き帰る葉青あをとしげりゐるなり

使はざる土鍋に小石を敷きつめて焼芋つくらむ一人居の昼

もう少し汁気なくなるまで煮むとガス台離れ煮豆をこがす

枸杞の葉は青あをしげり秋の日に淡紫の小花の見ゆる

ひとり生えの柿の木伸びて実の付きぬ渋柿ならむ細長き実

街路樹の銀杏の枝の伐はるる間近始まる黄葉またずに

門出でて明けゆく空を仰ぎゐつひとつまたたき街灯の消ゆ

目印に田の畦道に植ゑたりと赤あか列なす彼岸花

三河弁

豊川 小野可南子

本宮山の頭が見えれば傘いらぬ二人の孫に言ひ伝えとて

三河弁を調べてゆくが宿題と祖母我の辺へを離れず今日は

音読を我に聞かしむ孫千尋祇園精舎を棒読みスラスラ

五年生の少女千尋に吾あが聞かす所業無常のひびきあり……

いつの日か私の膝の軟骨となりてくるるかIPS細胞

左膝に熱く感じる痛みあり新しき靴に歩きゆきつつ

我が為にすばやく席を立つ虚女子をとめに掌を合わせつつアリガトウ

名古屋まで隣り合ひつつ楽しかりイスラム乙女と辿々話す

「バリ島が世界遺産になりました」別れ間際にをとめの笑顔

振り返り振り返りつつ手を振りて白きヒジヤブの少女等ゆきぬ

長塚節と中根岸養生院 豊川 夏目勝弘

狭き路次めぐり探しし中根岸養生院を知る人に会へず

三度もの手術に耐へし長塚節その養生院はこの空地と決める

池の端の咲き残れる山茶花に朝毎寄りゆきし節をぞ思ふ

中根岸の細き路次をめぐるとのみさて子規庵まで歩いて行かむ

信号待ち歩道橋を渡りしも子規庵までは七分余り

子規庵の前を今日は素通りして「そぞろあるき」の跡を辿らむ

思ひつき日光に行きし子規思ひ明日は我も行くと決めたり

今回は芋坂より巡りゆかむ羽二重屋はまだ開店の前

山も無き武蔵野の原はビル家並隅田川などもちろん見えず

烏瓜を歌ひし子規の道灌山玉づさはなし田端に向ふ

えのころ草

「招待」 秋 山 逸 穂

とおり雨国道越しに見えておりおり飛沫ながれくるなり
切切と近況語る電話切れふる里の野山目に浮かびたり
武骨なるふしくれだつたおおきな手老爺は器用に丸太を削る
ビルディングの谷間吹き抜く強風にえのころ草は穂叢かたむく
歳かさねアルバムの数増えており遺影写真の候補見あたらず

朱に

豊川 白井 信昭

暁を月に向かへり梅田浜へ月は背にあり帰り来たれり
国道の土手を覆ひて蔓高し紫立花気高くもあり
巾着の形をなせり群生地朱あけに朱あけに彼岸花美はし
崖食こまの形もあらは高麗川の今日の静かな流れに添ひて

祝ひ

横浜 阿部 淑子

(介護サービス)
エーゼット利用者増せり三十倍二周年の祝ひは明るさ満ちて

汗流し氷雨にもめげず坂を登り夫婦で通所何と百回

我が夫の労災病院への検査にはいづこの科にも座る席なく

バス降りて直ちに転倒しゃがみ込む退院帰途のひとり男性

宇宙での業務を果たし生還す重力適応試練を偲び

冬支度

東京 富岡 和子

富士の山夕焼け雲にくつきりと次第次第にビルの灯も増し

蔓色にかくれてをりし烏瓜すず風あとは赤き縞柄

葉もみじに混る二本の姥百合を友と足止む買物帰り

柚子の实のみどりと黄色とまじる日はわたしも部屋も冬支度する

つわぶきの日毎茎伸ぶ寒さ増し私の庭の庭しめくくり

『いじよせ』

(西浦公民館 いーはとぶ)

小学校のマリンバの音聞こえる夕陽広がる光の中に

吉見幸子

十月はピンクリボンの月といふピンクの上着に手を通さむよ

牧原正枝

石榴の実ひとつはぜをり秋の陽にひかりつつそのルビー色に

岩瀬信子

いつよりか郵便配達午後となる心待ちなる君の便りを

石田文子

愛宕の杜^{もり}百^も余りある石段をあへぎ登りて子育地蔵様

山崎俊子

娘とわれ小さき畑に種をまく種一粒のいとほしきかな

牧原規恵

若きらは出掛けゆきたり吾ひとり声だして読む「月日は百代の」

三田美奈子

背戸道を老猫抱きて散歩する仄か明るき十六夜の月

稲吉友江

玄関には釣竿一本残りをり今朝早々と幼ら帰りて

鈴木美耶子

私の一首

洞光寺写経初まる静けさに蝉時雨のみしきりに聞こゆ

金津文枝

金津家は、昔医師の家族で松江市宗泉寺に墓地があり広瀬の洞光寺は親戚になり、写経は近所の人と一緒に車で連れて下さり洞光寺の住職様も是非お待ちしますとまず婦人会で般若心経を唱え半紙に筆ペンで書き始め物音一つ無い写経が始まると広く大きなお寺、蝉時雨のみしきりに聞こえ一時間程で書き終る。本堂にお供えして皆様と一緒にお茶を戴き良い気持ちになり皆様と心晴れ晴れ車でお世話になり帰宅します。皆様ありがとうございました。

バスに乗る時も自転車に乗る時も吾が心には神様のあり

清澤範子

「苦しい時の神だのみ」と言いますが、私は、日常生活の中に神を信じ、弱い心を強く持ち、何事にもくじける事なく、心の支えになると言う思いで一首をまとめました。

薬の副作用で、長く歩くことが出来ず、日頃の生活は自転車に乗り買物をする。又病院へ行くバスに乗る。神を信ずることで夫と二人神社に手を合やすことの出来る喜びにもなるのです。今の頃は病院へ行く回数も増えましたが、元気を出して頑張ろうと思っています。

物言えぬ夫に付添い声掛ける見開くまなこじつと見つめぬ

近藤 映子

夫が出先から救急車にて八事日赤病院に入院しと、我家の留守電の一報からもう七年余、八回の転院をよぎなくして、今八年目も後半となる。

脳出血だった。当時は絶対安静両手足に点滴。かけつけた私に、夫の「お母さん！」とこの声は忘れられない。今経管栄養になると声も出せない。近頃私は娘と共に見舞に行き必ず「お父さん！」と耳元で二・三回小声にて呼ぶと、夫は目を見開いて、私をジット見てくれる。私が夫が「私が来たと分かった」と思える瞬間である。

洗濯は済みぬこの次何しやう問へど応への無い暮しはも

杉浦 恵美子

長い間、現代短歌で何故歴史的仮名遣いや古語を使用するのか理解していませんでした。『三河アララギ』で御津磯夫先生の御指導や諸先輩の作歌から何となく踏襲して来ました。

最近読んだ「日本語史」の中で、鎌倉時代以降書き方の規範を平安時代に求めたということを知りました。中には既に和歌などの雅語には中古の仮名遣い等を使用していたわけです。その伝統が現代まで継承されているのでしょうか、時には新鮮な感じがあります。

『俳句』

バス停の柔軟体操石路の花

植村公女

鶏頭花寂しくなりし握手かな

勝馬の駈け抜けてゆき秋麗

風影（ふかげ）なる集落ありて秋日暮

一石

外来の野草の勢ひ花野かな

皺深き人凜として秋日浴ぶ

送り火の消え現世にまた一人

喜仙

なかなか手ばなせぬもの秋扇

一人居の消えぬ夜更けの秋燈

散り散れる銀杏の遠く日暮れかな

皓一

なぞ解けり小さき落葉大銀杏

きらきらと枯葉輝やき御苑かな

「歴代天皇御製歌」(四)

貫名海屋資料館

「履中天皇」第十七代 在位四〇〇—四〇五

履中天皇は仁徳天皇の第一皇子。母は、磐之媛命、葛城襲津彦の娘

履中天皇は、各地に国司を置き、官事を記録させ、国内の情勢を報告させられた。蔵職を設立し、蔵部を置くことで、国家財政を安定させようとされた。

御陵墓、大阪堺市、百舌鳥耳原南陵（前方後円）

多遅比野たちひのに寝むと知りせば立薦たつこもも持ちて来ましもの寝むと知りせば

波邇布坂我が立ち見ればかきろひの燃ゆる家群妻が家のあたり

即位直後、酔って寝ている間に、弟の墨江中王が反逆し、宮に火を放った。

天皇は、大和へ逃げる途中、野宿をするならカーテンくらいは持つてくるのだった…と詠まれた。

大阪に遇ふや嬢子おとめを道問へば直ただには告のらず当藝麻道たぎまぢを告のる

難波宮から石上神宮へ逃げる途中、少女に出会い、伏兵がいるので遠回りしよう教えられた。

子規の短歌革新とアララギの歌人 (6)

佐藤 喜仙

(二) 新聞「日本」入社まで

ここで明治十六年子規上京の年から二十四年迄の主な歌を「竹の里歌」から拾って見る。

明治十六年

「ふる郷をかなたの空とながむれば窓にさし入るおぼろ月かな」

明治十七年

「路もなき浅茅が原をわけかねつ鈴蟲をふむ心地して」

明治十八年 (この年は八十首と多産)

「遠山は霞の衣ぬぎすてし我もかへなん春の花きぬ」

「月はさぞ我睡をばさますらんまきの戸たゝく夜半の水

鶏は」

明治十九年

「あるかとぞ思へばありと見ゆる也月のひかりにまがふ

卯の花」

「さかまきし水のしら玉こきちりて苔むす岩に花もさきけり」

明治二十年

「おぼろなる月影みずば春の夜も霞みわたると誰かしるべき」

「見渡せばはるか沖のもろ舟の帆にふく風ぞ涼しかりける」

明治二十一年

「我恋は眞の道にかなはずやむすぶの神もまもらざるらむ」
「ます鏡すみだの川の濁り江に濁らでうつる月の影かな」

明治二十二年

「おきあまる涙の露をしらねばや袂の上に月ぞやどれる」
「山々の錦のきぬのあはひより雪の顔出す富士の頂」

明治二十三年

「琴の音は松のこずゑにのこりけり月はむかしの面影にして」

「海へ来て泳げぬ我は白妙の衣をぬいで頭かく山」

明治二十四年

「かたりあふ友こそなけれ口なしの色に咲くてふ山吹の花」
「めでつゝも行きや煩ふ春の月しばしはやどる花の上かな」

子規の歌十六首いかがですか。年齢で言えば十六歳から二十四歳にかけての作品です。ご鑑賞のほどお願いいたします。

長塚節と中根岸養生院

夏目勝弘

明治四十四年十二月六日付の岡三郎あての手紙に「昨日入院仕り候(略)」とある。

この中根岸養生院の場所を見たく鶯谷の駅に降りた。もう何回もこの根岸に来ているが言問通りの中根岸は初めてである。目当は根岸小学校を探すこと、前を通り過ぎてしまい、一本間違つて曲つてしまった。

地図の上からはこんなに遠くはない、折りよく園児連れの母子が来たので、根岸小学校はと、公園の所を曲がればすぐです、しばらく行くと分かれ道となり右せんか、左せんかと立ち止まっていると後方よりさきほどの母子連れの声がして、ようやく小学校の前に。

次の目当ては円光寺という寺である。小学校とこの寺の間当りに、中根岸養生院があつたと云う。

自動車一台やつと通れる路次を右に行き左に曲り、また元の位置に。

建ち並ぶ家々を見ても古そうな家は一軒もない。しかたなく鶯谷の駅に戻り、トイレに入り、また始めから探すこととした。道にオマワリさんが立っていたので、円光寺の場所を聞く、婦警さんが地図で調べ探してくれた。

ようやく円光寺に出たが、その寺の前は幾度も通り過ぎた所である。

中に入り聞こうと思つたが犬が放し飼いにしてあり、こちらを見て低く唸り声を上げるのでやめた所である。

養生院のことを聞こうと思ひ、老人を探すも町の人らしい人にも会わない。

会うのは電気工事の人大工さん、自転車を通る人のみ、地図上の位置に二百坪余りの空地がある。ここを養生院と一人

決めして帰ることとした。

子規の死が明治三十五年九月、それから九年余の年月が過ぎてゐる、何故長塚節は、根岸の病院に決めたのかと、ふと思つた。

養生院と子規庵とは、どれほどの距離があるであろうかと、歩いてみることにする。

言問通りの信号が青になるのを待ち、尾久通りの歩道橋の上から中根岸と子規庵の方が一本の道で続いているのを知る。歩道橋を下り今まで幾度も通つた子規庵への道を行く、七分余りで子規庵の前に着く。

子規庵の前は立ち止まったのみで「そぞろあるき」「道灌山」の紀行文を辿ることとした。

羽二重屋の前に出る。今回は逆に巡ることとし、芋坂を上がつて行く。

○芋坂も団子も月のゆかりかな

子規の俳句と共に芋坂の由来の立札、自然薯が多く取れた所からと、その由来と我が家の近辺とをあてはめれば、川に下つても山に向つても芋坂ばかりである。

つまらないことを思いつつ、谷中の広い墓地の道を道灌山に向う。

王子町初音町等の旧町名の由来の立札を見、子規も立寄つた諏訪神社に賽を落す。

道灌山より見えるものは、ビル、ビルそして家並に広い道路、隅田川の川面すら見えない。

道灌山の由来などを読みつつ道に出る、樺の落葉を掃き集めたのかゴミ袋二十余が積んである。片辺に汗を拭く二人の老人がいた。

ご苦労様、心のなかで言い、田端に向う。田端の高台より、の景も子規の見たものは、思い浮かべるよりしかたがないが、とりあえず一度その地に立つてみたく田端へと歩を進めた。

贈呈誌

柀 十二月号

上坂和枝

松原の向こうに光る海見えて真砂の白き浜いくつ過ぐ

愛媛アララギ 十二月号

大石 ひさえ

吉田 恵美子

亡き人の誕生日とて何せむに酒持ちて来ぬ夫のおくつき

里の庭に草刈りおれば幼き日のままに石あり腰掛けてみる

大城 敦子

群山 十一月号

皆川 二郎

早々と塩漬けせしを持ちて行く小三の児らと梅干し作らむ

岩間よりひともと咲ける石路に冬立つ庭の寂しさを見つ

鹿兒島アララギ 十一月号

今村 節子

大室 外次

賑々し一家総出の刈り入れかコンバインの響きも混じりて

朱あかのこる夕べの空に連なりて雪と藍あゐとの早春の山

市来 栞

榎の木 十一月号

鈴木 晃子

地につくまで枝垂れし庭の紫式部色あざやかにつぶら実つきぬ

買上げの文具を入れる袋あまた数多使ひ残して閉店したりき

高知アララギ 十一月号

小原 和子

西村 ちせ

開け放ちうたた寝すればわが体空の底ひに引き込まれゆく

暑き日の夕くるる庭にはのかなる匂ひ立ちくるオシロイの花

竹内 艶子

穂の原 十月号

田中 浄子

我が座るソファ―はいつも同じ場所南の空の果て迄見ゆる

真直ぐに伸びし色よし葉ねぎ苗明日の風に備へてこぎゆく

ある自然科学者の手記 (8) 大橋望彦

天才と凡才 (1)

世の中には天才とか凡才とか言われる区別がある。本当にこのような区別があるのだろうか？ この区別を考えることは、才能に先天的なものがあるか否かを考えていることだろう。基本的に才能というものはあるのだろうか。これは生物学の問題として、脳の発達が生物の進化と共に変化した結果を示していると考えても好いかも知れない。生物の発生段階で、脳の発生はかなり初期に形成される器官であるが、この辺が問題なのかもしれない。この問題意識は、小生独特のヒネクレかも知れないが。

受精卵(精子と卵子が受精により生じた体細胞の最初の段階の細胞)が細胞分裂により細胞数が倍加して、細胞は組織化していくが、初期の段階では表皮の組織(外胚葉:epiderm)であるとか、各種消化器官の元になるような管腔組織(内胚葉:endoderm)や、次第に神経組織や脳組織(中胚葉:mesoderem)が形成されてくる。この間に、各細胞は周りの細胞の影響を受けながら細胞分裂を繰り返していることを忘れてはいけない。この周りの細胞の影響こそが、後の細胞の運命を左右しているというのは大袈裟なのだろうか。この大袈裟な考え方が、先の問題意

識のヒネクレなのかもしれない。

実際には、生物の発生には、色々な法則が知られており、極めて精巧な機構により発生の段階は制御されている。この制御機構の元は、簡単に言えば、各細胞の持っている遺伝子の発現機構の差であるといえる。簡単に言うことは、問題を難しくしてしまうかもしれない。ここで言う各細胞というのは、一つの個体が持っている体細胞は全て等しい遺伝子を持つた細胞から成り立っていることは明確である。然し、各細胞の働きは、そこに置かれている環境により、それぞれ独自の働きをしているが、全てその働きの独自性は持っている遺伝子の発現の差によって異なってくるのである。即ち、遺伝子という構造体はどの細胞にも同じものが存在しているも、その色々な遺伝子が働くか働かないかは、個々の細胞によってその置かれた環境次第で異なってくることを示している。しかもその環境たるや、同じ周囲の細胞自ら作った環境なのだ。此の辺がアナログの世界といえるかもしれない。それでも、発生の段階では、どの細胞も間違いのない役割分担が行われていて、一個の細胞が分裂するのを切っ掛けに、二個の細胞となるとそこにはお隣同志の細胞という環境を作り、次の細胞分裂は何時、どっちの方向(上下左右)に細胞分裂が行われるかを決めてしまうのである。四個になった細胞はその環境下にあつて、それら個々の細胞が、それぞれ独自に、何時どっち

の方向に次の分裂を行えばいいのかが決められている。この繰り返しは、個体が完全に形成されるまで（ヒトの場合は六兆個の細胞となるまで）続くのである。発生の初期段階は正にその細胞分裂の繰り返しに懸命の努力が払われるかの如く、組織形成に傾注され細胞分裂の繰り返しのみが進行するが、途中から、それぞれの組織分担がハッキリして来て、一つの器官と成ったり特殊な役割の組織と成ったりすると、その細胞が分化した機能を發揮するようになる。そうなると各細胞は益々独自性を持つようになり、独自の環境を作るのが専門と成る。ここまででは、個人個人でもそれほど違いはなく個体形成が行われている。然し、脳などの器官は、形態形成の初期に、他の組織がまだ発生途上にあっても脳器官として完成してしまう。それからは専ら分化した機能が充実にいく。此の辺から個人差がどんどん開いていくことになる。ここから個人差が出るというものの、教育の差程度でしかないのであるかもしれない。否、教育の大切さが此の辺から始まると考えてよいかもしれない。これは勿論未だ母体の胎内にある時期である。したがって胎教が大事であるというのも満更否定出来ない。ただ、脳の記憶等の機能が何時から始まるかは定かではない。出生した時点で、脳が完成している事だけは確かである。であるから、脳の構造は出来ており、ヒトは皆均等に機能の馴化と、教育が成されていると言う事である。一般に云う、後天的に獲得する

ものが脳の働きといえる。

話は少しそれるが、面白い事が知られている。松喰い虫としてよく知られている微生物に線虫類という生物がいるが、その一つに、*C. elegans* という種類がある。この小さな個体（体長約1mm）は成虫では全部の細胞数が959個と細かく判っている。それが、一個の受精卵から卵割が始まって、次々に分裂する細胞の順番が最後まで追跡されているのである。正に個体形成のプロگرامが完成された生物で、即ちこの線虫は、個体形成の細胞系譜が完全に判っているのである。ある時は、一定の回数分裂してきた細胞が、ここまでくるとこの細胞はこの場所で死ぬことにプログラムされている。と、まで判っており、そこでその特定の細胞が死なないと発生は止まってしまい、個体が死んでしまう。何故ならば、その場所は、別の細胞が分裂して出来た細胞によって埋められる位置であるからである。そして、この細胞のプロگرامド・テスこそ、老化の宿命的に死するメカニズムを追求する好個の材料となる、と考える学者（老化学の研究者）が世界中に沢山いるのである。ここでは全ての細胞の運命は遺伝子により拘束されていて、先天的な運命に左右され、後天的な行動は許されていないのである。天才の塊のような生物の脅威が、少し判って来たかの感がする。

つづく

絹の話 (26)

「アトリエトレビ」今 泉 雅 勝

絹の機能性 その3 (絹を着る)

絹は古来より今日に至まで洋の東西を問わず人々の憧れの繊維です。化学繊維の研究は絹に追いつけ追い越せの歴史でした。昨今の科学繊維は摩擦に強い事では絹を遥かに凌駕しました。而も均一で、自然に左右されず計画的に生産が出来、需要に応じ千変万化できるので、低コスト大量生産が可能になりました。僅か50年で繊維の中心的存在になり、もはや天然繊維100%の衣料品を目にする事は希有になってしまいました。

洗濯も洗濯機任せで簡単、記憶形状などの進歩により、アイロンさえ不要になるうとしていて、その便利さを享受しています。ところが、化学繊維の普遍化に伴って肌荒れやアトピー性皮膚炎などが増大して来ました。鉱物素材に化学触媒、化学染料などで作られる繊維はかなり強力な静電気地場を持っており皮膚を蝕んではないないでしょうか？

それでは絹はどんな繊維か機能性面を見てみましょう。

年配の方なら懐かしく思うでしょうが、子供の頃、冬風邪をひいて喉が痛くなると真綿を首に巻いてもらった、背中に真綿を貼って貰った事の有る人は大勢いらっしゃる事と思います。

*絹は保温性、放温性(20℃〜30℃を保とうとする！蚕が糸を吐く時の快適な温度！勿論もつと高くも低くもなるが、あまり高くなると冷房的作用、低すぎると暖房的作用をして、人の体温に実に都合の良い範囲で作動する)に優れていますので低体温に陥りにくく、高温で蒸れて汗びっしょりになりません。

*絹は保湿性、放湿性(繭が蛹を乾燥させず羽化するまで保護する機能、人の皮膚の湿度に近い状態)に優れているので、喉や背中乾燥を防ぎ、汗をかいてもいち早く放湿(綿の2.5倍のスピード)するので気化熱で体温が奪われず、寒気など催す事がなくなります。これらが相まって血行を良くします。

冬山に行く人は汗の発汗作用で体温を奪われすぎず命拾いする事も有ります。ジョッキングする人にも体温消耗を防ぎ効果的です。2013年箱根駅伝に出場する東京農大の選手が絹の下着を着用します。

*絹には殺菌作用は有りませんが、素晴らしい抗菌性(静菌性)が有りますので、風邪のウィルスの繁殖を防ぎ、風邪が大事に到らず、早く治るのです。怪我をしても化膿する事を防ぎます。傷口等に絹の端切れを貼ってからバンドエイドして下さい。

*絹には防臭性が有ります。どうしてそうなるのかよく解明されていません。ただ完全に吸臭する訳ではないのですが、エンドレスに作用します。絹は汗を菌が分解し、アンモニアを作って汗臭くなるのを防止する事は解明されています。ですから、体臭の強い人、老臭、長期療養者等に効果的です。

*絹には緩衝性があります。絹を手縫いした事がある方には心当たりがあると思いますが、密に織られた生地を縫うとき針が通りにくく、曲がったり、折れたりします。防弾チョッキに使われて来たくらいですから！不意に災害に遭って物が当たった時怪我をしなくて済むかも知れません。絹の古着等を床ずれ防止などにもお使い下さい。

*絹は天然繊維の中では難燃性で燃焼時有毒ガスが発生しませんので、優れた防災服でもあります。

*絹には防紫外線性があります。同じ薄さの物で比較すると、絹がどんな繊維より紫外線を吸収、反射します。絹の中でも山繭蛾科の多孔質繊維(ナノチュウブ:3)6デニールの繊維に200前後の穴があり、その穴の片側が絨毛で覆われている)は紫外線をエンドレスに吸収しますので、絹を着ると日焼け止めになります。絹は波長の短いものに抵抗するので、電磁波障害の予防等にも効果が有ると思われれます。

*絹は湿度が高くなると微量のマイナスイオンが発生します。日本の5~9月頃は常温で発生しますが、着用すると常に湿度と温度が有りますのでマイナスイオンによる広葉樹林の森林浴的気持よさを感じずる事が出来ます。

*絹を直接肌に付けていると、絹のお握り型繊維が微細ヤスリの効果を發揮して、古い角質層を除去し肌をツルツルにします。また、僅かながらコラーゲンの減少を抑制する様ですが、確証は有りません。化学繊維の普遍と心の荒廃が同時進行ですが、絹を美しく着て、心豊かで健康を維持したいものです。

*絹を着る事は農薬のない桑園や広葉樹林を増やす事であり、結果、土壌や河川、海を豊かにします。

物理学者と詩歌の世界 (36)

一石

S・チャンドラセカール

スブラマニアン・チャンドラセカール (Subramanian Chandrasekhar 1910-1995) はインド生まれのアメリカの天体物理学者。1983年ノーベル物理学賞受賞 (参考資料1)。

イギリスの統治下にあった英領インドのラホールに生れた。19歳の時、イギリスへの渡航途中、船上にてブラックホール (注1) の存在を証明した。マドラスのプレシデンシ大学を卒業 (1930)。その後、ケンブリッジ大学に留学 (1933)。博士論文では研究白色矮星の質量に上限があることを理論的計算によって示し、恒星の終焉に関する「チャンドラセカール限界」 (注2) を提唱した (1932)。チャンドラセカール質量を超えた天体がブラックホールになりうることなど、後年が高く評価される結果をアーサー・エディントン (注3) は徹底的に批判したため、二人の間に確執が生まれる。1937年、アメリカへ移住し、シカゴ大学教授およびヤーキス天文台研究員となって天文学に関する研究を進めた。白色矮星の内部構造、恒星内部でのエネルギー伝達、恒星の進化と終焉についての業績がある。アメリカ国家科学賞 (1966)、ノーベル物理学賞 (星の構

造と進化にとって重要な物理的過程の理論的研究) などを受賞。シカゴで死去 (1995)。

著作に『星の構造』 (講談社)、『真理と美 科学における美意識と動機』 (法政大学出版局)、『チャンドラセカールの「プリンキピア」講義 一般読者のために』 (講談社) などがある。

チャンドラセカールにまつわるエピソードを挙げる。

1) 叔父のチャンドラセカール・ラマンは「光の散乱に関する研究とラマン効果の発見」で1930年にノーベル物理学賞を受賞している。

2) チャンドラセカールにちなんだエックス線観測衛星「チャンドラ」はスペースシャトル・コロンビア号によって宇宙に打ち上げられた (99)。

3) 「私の科学者人生のなかでも最も衝撃的だったのは、数学者ロイ・カーが発見したアインシュタインの一般相対性理論の厳密解により、宇宙には大質量のブラックホールが無数に存在することが厳密に示されたことである。」 (参考資料2)

注1: K・シュワルツシルドはアインシュタインの一般相対論の重力場方程式から後にブラックホールと呼ばれることになる解を導出 (16)。重い恒星の「死」に際し、重力によって一点へと収縮したと

きに残される極端に歪んだ時空では光さえも逃れられない。この現象を精力的に研究したJ・ウィーラーは、このような天体をブラックホールと命名(69)。はくちょう座X1番星に最初のブラックホールが発見された(70)

注2 太陽のように自ら光を放つ恒星のなかでは水素を燃やしてヘリウムに変換する核融合反応が起きる。恒星がそのほとんどの水素を燃やしてしまうと、重力場に対抗して自分の大きさを保つ圧力を作り出すことができなくなり「縮退」の状態という膨大な高密度まで圧縮される。その膨大な密度は(量子論のフェルミ・ディラック統計による)「縮退」により説明された。1915年アダムズによって発見された白色矮星は、そのような天体で、地球ほどの大きさで地球よりもはるかに質量が大きく高密度である。チャンドラセカールはすべての星が白色矮星となるわけではなく、太陽質量の1.4倍より重いと超新星爆発を起こし、軽いと地球程度の白色矮星となり、さらにエネルギーを失って消えてしまうとし、質量による星の進化の理論を確立した。この白色矮星になる限界を「チャンドラセカールの限界」という。

注3 アーサー・エディントンはイギリスの天文学者。20世紀前半における最も重要な天体物理学者の1人。コンパクトな天体に降着する物質から放射さ

れる光度の上限を与える「エディントン限界」を導出。エディントンは特に相対性理論に関する業績で知られている。1919年の皆既日食で、太陽近傍を通る星の光の曲がり方を観測。観測結果はアインシュタインの一般相対性理論の予測を裏付けるものであった。しかし、1930年、チャンドラセカールが初めてブラックホールの存在を理論的に指摘した際、その指摘をともに検討することなく否定した。当時、科学会の重鎮だったエディントンの影響は大きく、チャンドラセカールの指摘は忘れ去られてしまうこととなった。この事件によって、ブラックホールの本格的な研究が始まるのが60年代にまで遅れてしまった。月のエディントン・クレーターは彼の名前にちなんでいる。また小惑星「エディントン」にも彼の名前が付けられている(参考資料3)。

参考資料

- 1) フリー百科事典『ウィキペディア』: スプラマニア・チャンドラセカール』: Wikipedia 'the free encyclopedia' 'S.Chandrasekhar'.
- 2) M. Rees 'Our Cosmic Habitat' Princeton University Press
- 3) フリー百科事典『ウィキペディア』: アーサー・エディントン』: Wikipedia 'the free encyclopedia' 'A. Eddington'.

短歌に詠まれた茂吉―あるいは茂吉を詠んだ歌人―

「月虹」 鮫島 満

八 山口茂吉 1

行きかひのしげき銀座の夜の街を君に随ひて歩みけるかも

大正十四年『杉原』

焼跡に君と立ちたりひろびろと焼けて空しきやけあとの原

いつしかに日は暮れにけり君と我が焼け書をあさる焼あとの原

つくづくと憂ひこもらす君のため慰め言はむ言を知らなく

われさへに心あやしく極まりて君に面向ひ物言はず居り

山口茂吉は大正十四年二月に行われた「茂吉帰朝歓迎歌会」で初めて茂吉に会い、その後、茂吉の著作の誤植を指摘したことをきっかけとして師事した。落合京太郎が、「斎藤茂吉の忠実な助手として一生不変」といふことだけで山口君は必ず弥陀の来迎を仰ぐことが出来たに相違ない」（「アララギ」昭和三十三年十月号）と追悼文に書くほどの仕えようを一生貫いた。

二、三首目は、茂吉帰朝の直前に全焼した自宅・病院

跡に立つての作である。茂吉のある日の日記には、山口茂吉と一緒とは書いていないが、「午後ハ『倉』ノ焼跡ヲ片付ケ、掘ル。春面数冊ナドガ助カリ黒焼ケニナリキル」とある。四、五首目は、あまりの悲惨さに、先生の顔をまともに見ることもできず、掛ける言葉も思いつかないことを詠んでいる。

数学のはなししながら三たりして観音堂にのぼり行きけり

昭和二年 同

海見ゆるみ堂の庭に甘酒を飲みつつ君と語る親しさ揺れながら走る電車のなかにして疲れし君はねむり給へり

題に「鎌倉行」とある。一首目の「三たり」は茂吉、茂吉の長男茂太と作者である。「観音堂」は長谷観音である。茂吉の日記にはこの日のことが、「朝、山口茂吉君来ル。茂太ヲ連レテ三人ニテ鎌倉二行ク。カクノ如キ遊び、散歩ハ帰朝以来ハジメテナリ。ソレホド僕ハ時ヲ惜シンデキタルナリキ。鎌倉八幡宮、宝物殿、大塔宮牢ノアト、長谷観音、大仏、江ノ島、藤沢、ソコニテ牛肉ヲ食ヒ夜ノ10時半ニヤウヤク帰宅スル」（四月十日）とある。帰朝以来茂吉は病院再建のために忙殺されていたのである。十一歳の茂太を連れての鎌倉遊行の途次に数学のはなしをしたというのであるが、どのような成り

行きでそうなったのかを思うと面白い。「揺れながら走る電車」は江の電（江ノ島電鉄）であろう。

上諏訪の温泉を浴みてねむり来てただにし君は言ひ
たまひけり 同

いきどほろしき事のまにまに人を罵る君をしぬばむ
山を行きつつ

題は「信州数日（赤彦追悼歌会）」である。時は十月。忙しい茂吉はやはり信州での五月の歌会には参加できず、日記に「今日ハ信濃富士見ニテ左千夫忌、赤彦忌歌会アル筈ナレドモ僕ハ出席スルコトヲ得ズ。徒ラニ病院ノコトニツイテ苦慮ス」と書いたのだった。この度の信州行では上諏訪の旅館布半で何度も温泉に入っている。一首目は、山口茂吉に「上諏訪の温泉を浴みてねむり来」と命じているのだから、少し散歩でもして来いというようなことを言ったのだろう。この年四月に養父紀一に代わって院長に就任した茂吉には「いきどほろしき事」が次々に襲ってきており、時には「人を罵る」こともあり作者も聞かされることがあったのだろう。藤岡武雄の作成した茂吉年譜には、「病院事故多きため、警視庁より院長更迭の示唆をうけ、斎藤紀一に代り、青山脳病院長の職をついだ」（四月）、「この頃患者の死亡者多く、看護人を募集しても長く居つかない。病院のことで心痛す

る」（五月）等とある。そんな茂吉を知っている作者は、梅雨しづく夜ごろを心くるしめる君の面に脂うきを
り 昭和三年 同
とも詠んでいる。

書きもののなかばに君は肌ぬぎて海月の刺ししあと
を見せませす 昭和五年 同

茂吉が海で泳いで海月に刺されたという話はこの歌だけによつて知ることではないだろうか。この年、茂吉の日記は七月七日から九月三日までが欠けていて、いつ、どこの海に行ったのかわからないのは残念である。

独逸より君帰り来て選りたまふ童馬山房選歌八とせ
経にけり 昭和八年 同

茂吉が三年余のドイツ留学から帰国し自宅に着いたのは大正十四年一月七日であった。そして留学中に中断していた「アララギ」の選歌（童馬山房選歌）を再開したのは大正十五年五月号からであった。右の歌は、その再開から八年が経ったことを詠んでいるのである。

楽しい時間 2

山本紀久雄

人生は己を探す旅である、といわれているが、今まで自分が知らなかったこと、気がつかなかったこと、それらと出あうのも「探す旅」に入ると思う。

今月の辻照子先生料理教室では、卵の割り方を学んだ。恥ずかしながら、他の人にとっては当然の割り方と思われることを、今日まで知らずに生きてきたわけで、これについては後段でお伝えする。

さて、今日も最初に進行担当の和田さんの笑顔が登場する。「今日はイタリア白ワインです。ぶどうの品種は三種で、皆さんよくご存じのシャルドネも用意しましたよ。シャルドネについては、ちよつと調べておきましたので、コピーしてきましたね」明るい張りのある声。資料には次のように書かれている。

「シャルドネを味わいたいと思つたら、まずはシャブリからというのが普通です。シャブリ地区の土壤は大部分が石灰質で、一部は粘土質のところもあります。こういう二種類の土壤は地温が暖まりません。これがシャブリの味わいにおいて、よい影響を与える条件です」

この資料説明は妥当である。というのも以前からシャブリに興味を持ち、いずれ他のテーマと絡めて本にする予定で、その取材で今年の2月、現地を訪れているからである。

シャブリは ① CHABLIS ② PETIT-CHABLIS ③



PREMIER-CHABLIS ④ GRAND-CRU という四つにランク分けされているが、それぞれ畑が異なり、畑の方位位置も違っている。GRAND-CRUは南向斜面、CHABLISは北向き地区で育てられている。上の左写真が GRAND-CRU畑の南斜面、右写真はその実際地面状態で、貝殻が地上に出ている、石灰質であることが分かる。シャブリはブルゴーニュ地域圏ヨンヌ県にあり、パリから行くには12区のベルシー駅 BERCYからフランス国鉄 SNCFで1時間40分乗車、オーセーヌ駅 AUXERREで降り、そこから18km、タクシーで30分程度のところ。詳しく書きだすと肝心の辻先生の料理教室に入れないのでこのくらいにするが、かつては海の底だったという因縁実が、白ワインならシャブリと称される背景に存在している。

辻先生の料理教室は大人気で、今日も7人の新人が登場した。人気の秘密はいくつもあるが、最大要因は料理メニューにある。気が利いておしゃれなのだ。

辻先生は料理の前にマナーを常に語る。今日のマナー教室は「ビュッフェパーティーマナー」で、それを①会話を楽しむ、②テーブル上の料理のとり方、③椅子の取り扱い方、この三面からパーティー会場を彷彿させる話し方で、実践的で具体的に教えてくれる。これにも頷くこと多く納得する。

今日の料理メニューも三つ。

① ポークのキャベツ巻き

② ソーメン寿司

③ パンプキンのクリームチーズ

ところで、この料理教室には辻先生以外に、当方には私的監督がいる。みどり監督であるが、この女性監督の指示のもとで調理するようにしている。そうしないと手順を間違えること多く、チームメンバーに迷惑をかける可能性が高いからである。みどり監督と当方は、この辻教室で一番の古株だ。

さて、料理メニュー三品の中で「ソーメン寿司」に高い関心を持つ。日頃、自宅にいる時の昼食は、たいていざるそば等の麺類をつくり食べているが、今日のソーメン寿司は知らなかった。隣のみどり監督のご主人に聞いてみると、彼も「いや、知りません」との答え。

そうか、お互い知らなかったのかと、俄然ソーメン寿司に積極的にとりかかったが、ハタと手が止まる。レシピ手順に「薄焼き卵を焼く」とあり、ここで止まったの

だ。何故なら、薄焼きはできるが、それを海苔一枚(21cm×19cm)の上に綺麗に敷く伸ばして敷くのが、不器用な当方にはできない。そこでチームメンバーの若い女性にお願いしたところ、彼女が卵を調理台上的、平らなところで割った。

エッ、ボウルの縁など角張ったところで割るのではないのか。早速、辻先生に質問する。「平らなところを使つて割る方が、カラが入らず、キレイに割れます」「調理台の上やコップの側面などに、少し勢いをつけてぶつけるのがポイントです」。成程と思う。

今まで目玉焼きを作ろうとして、角で割って白身にカラが入つてなかなか取れず、箸でかき回してしまった経験を多々している。これは卵の割り方を知らなかったせいだったのだ。全く長い人生で無駄なことをしていたものだと思ふ。

三品が出来上がると、別室のテーブル上に運び、全員で食べる。これがまた楽しい時間である。若い世代が多く、日頃の同世代と話す内容とは話題が異なるからだ。

隣の若い女性、本が大好きで、毎日一冊読んでしまうという。その彼女が「自分も作家になりたい。今、ライトノベルに挑戦しよう」としているところだ」と語るが、これにも、エッで、ライトノベルという分野は知らなかった。この女性の解説によると、この分野から直木賞作家も輩出しているという。

自分たちで作った料理と白ワイン。ワイワイガヤガヤと盛り上がり、気がつくとき締めめの和田さんが再登場している。今回の辻照子先生料理教室も、楽しい三時間であった。

「氷魚」のことから(144) 岡本八千代

庭萩の黄金のもみじ葉もこぼれつつある。こんな季、思う「年年歳歳人同じからず」を。しかし、また「年年老いて年年賢し」と言うでないか、とも思う。どちらも一理あつて私には楽しくなる。

いよいよ、平成二十五年(二千十三年紀)。そして、「三河アララギ」は、第六十巻、第一号となる。――。

流れ去った月日はもどらないが、私が「三河アララギ」の会に入ってから私の月日が、そして私の生きざまが、この「三河アララギ」に残っているではないか。何というありがたいことであろうか。創設者、御津先生ご夫妻をはじめ、この会の方々にお会いできて、私をお導き下さったお陰である。私もかなり老いてしまったけれど、創作してゆく心があるかぎり続けてゆくことができたらと念ずる。

△子規の小説「当世媛鏡」二十八〜三十一。

廿八。(同年の冬)

● 乳母のあさも中谷豁あきつらとの結婚を勧めたが、だんだんとお清も才吉のことを思わなくなってきた。

● お清はついに、美しい髪を剃り、友禪の振袖を脱ぎかえて、自ら「清月尼」と号けて新比丘尼となつてしまった。

廿九。〜三十一。(ほぼ三年後の春)
廿九。

● 今日、清月尼となつて、その暮しに明け暮れているのだった。そこへ、お清様と俗名で呼ぶ人が来た。それは才吉であった。(ここからうたたねの中の思ひ出)

● 「鬼ごっこしましょう」と。そこには才様とたく子さんが居る。二人は逃げて、清が鬼になる。

● その中に、糸井さんや、平塚での老嫗ろうごも出てきて、おまけに、撞木を振りあげて今にも打ちかかろうとして出てきた。

● お清が逃げようとするところへ、「お清さん、お清さん」と呼ぶ人があつた。

● 呼ばれて、眼を開けたその時、机にもたれてうたた寝をしていたお清の心の迷いもさめたのだった。あさがよんでいた。

● あさは北海道へゆくことになり、お清に別れを告げに来たのだった。

三十。

● 才吉が、たく子をつれて、ちかい内に向島へゆき、お清様のところへお寄りになさるとか?を知らせた。

● また、中谷から、お清への思いをこめた手紙が来たが、一答えられないほど悲しさが湧いてきて、人生をはかなく思う。

三十一。

● 清月尼は、ついに、「母よりもらいし命を二十年縮めて惜しや貞女の鑑を残す」身となつた。…白髪だいたんえんの翁の墓参り「八十兵めでございます」で終わり。(大団円)

(小日本・明治27・7・15三十一)

ことのはスケッチ (409)

今泉 由利

『螺鈿』

天照大神。農耕民族の最高神、女性神様です。田畑を開き、自ら養蚕をおこなわれ、機を織り、織りあがった布は草木で染められたことでしよう。日本の国は平和に過ぎていました。

日本の最高神のされたように私も糸を紡ぎ、織り、図案を描き、草木に化学に染め：テキスタイルを志してきたつもりになっている。

イタリア、地中海、サルディニア島、大型二枚貝（ピナ・ノピリス貝、日本のタイラギ貝に似て、もっと大型）の足糸ピシユスを使つての手紡ぎ、手織り：たったひとりになつてしまつて守つておられるチアラさん紹介の講演を聴いた。

昔、地中海あたり、ピナ・ノピリス貝のわずかしかない足糸を集め布をつくることに多くの女人が携わつていたそうです。貝が海底の岩に足糸を引つ付け定着する。その少ししかない繊維を集め、とことん洗い、ほぐし、紡ぎ、亜麻色の糸と成し、織る。

近年、乱獲、観光化、海の汚染：により自然保護、採取禁止、文化遺産継承のみとなった。

アルゼンチンに居た頃、よくムール貝を食したけれど、貝についた足糸を取り去るのが大変だったことを思い出した。こんなに短いものでも糸にしてしまつたのですね。

昔、古代エジプトの埋葬で、この足糸布は「ミイラ」を包

んだのだそうです。

亜麻色の糸を、レモンで酸化させて黄金色にもしたそうです。手袋やシヨールに、大切に使われていたのです。

チアラさんが手のひらサイズの二枚貝を、「これは日本の天皇のベルトの貝ですよ」と言われたそうです。

まさか、貝がそのままベルトにつけられていた訳ではないでしょう。そして思い当る。

祖母の代からの呉服屋さんが、番頭さんに大きな風呂敷包を担がせて、しばしばやってきていた。そして、奥座敷いっぱい反物を広げているのを見て育つた。

それは、祖母や母や姉達のためだった。ある日、それが私のためになった日があり、最高技術の日本刺繍が施された振り袖が広げられた。刺繍の辺りが細く長くキラリと真珠色に輝やいた。呉服屋さんが「貝、です」と言われた。

父と母といて、私の着物と決まつた。そしてそれはそれは美しい着物をもつて、アルゼンチンへ行つたのでした。

アルゼンチンで、セリーナさんの「集まり」とか、古典衣装のフアッション・シヨール、テアトロ・コロンのガラ・コンサート：おひろめできました。

繊維に螺鈿の応用はあるのだろうか、調べてみた。螺鈿ベルシヤ文様西陣帯」というをみつけた。帯に金箔や色箔で紋様を押し、中心の鳳凰は螺鈿を施してある。奈良時代に唐から入ってきた螺鈿の技法は、ステータス・シンボル、天皇の「ベルト」に施されたに違いない。

頌春

平成二十五年元旦

三河アララギ会

青木 玉枝
(新城市)

(新城市)

安藤 和代
(豊川市)

(豊川市)

胃 甲 節子
(豊橋市)

(豊橋市)

今 泉 由利
(東京都)

(東京都)

伊与田 広子
(豊橋市)

(豊橋市)

伊藤 忠男
(大阪市)

(大阪市)

遠藤 脩子
(蒲郡市)

(蒲郡市)

岡本 八千代
(蒲郡市)

(蒲郡市)

小野 可南子
(豊川市)

(豊川市)

金津 文枝
(島根県)

(島根県)

清澤 範子
(春日井市)

(春日井市)

近藤 映子
(名古屋市)

(名古屋市)

佐藤 喜孝
(東京都)

(東京都)

杉浦 恵美子
(蒲郡市)

(蒲郡市)

高山 玉由
(USA)

(USA)

富岡 和子
(東京都)

(東京都)

内藤 志げ
(豊川市)

(豊川市)

夏目 勝弘
(豊川市)

(豊川市)

林伊 佐子
(岡崎市)

(岡崎市)

半田 うめ子
(新城市)

(新城市)

平松 裕子
(豊川市)

(豊川市)

平松 温子
(東京都)

(東京都)

堀川 勝子
(豊川市)

(豊川市)

山口 千恵子
(豊川市)

(豊川市)

山本 恵子
(豊川市)

(豊川市)

弓谷 久子
(豊川市)

(豊川市)

和菓子街道 (75)

<http://www.trad-sweets.com/>

平松温子

大津から京への最大の難所と言われた逢坂を上り詰めると、古関跡を示す石碑群が待っている。平安時代の歌人で琵琶の名手でもあった蝉丸法師の歌〈これやこの ゆくもかえるもわかれては 知るも知らぬも 逢坂の関〉の舞台となった場所だ。

逢坂峠付近は「関西の箱根・軽井沢」とも言われ、夏も涼しい避暑地だった。今でこそ歩いてここを通る人もめっきり少なくなったが、かつては逢坂を越える旅人の間で土産として人気があったのが大津絵だ。江戸時代に発展した民画で、「鬼の念仏」「藤娘」「槍持ち奴」などのキャラクターが、大らかなタッチでユーモラスに描かれているのが特徴。

現在でも大津絵は細々と継承されているが、大津絵の絵柄の焼き



印を押した手焼きのカステラ煎餅「大津絵煎餅」も現代の土産として人気だ。食いしん坊にはこちらの方が、むしろ喜ばれたりして？

図柄は、現代の大津絵師・高橋松山によるもの。

◆大忠堂

住所：滋賀県大津市観音寺8-17

電話：077-522-3204

お知らせ

▽二月号の原稿は、一月一日(火)までに、必着、郵送のこと。

※毎月の原稿が、期日までに到着しないと、編集に支障をきたします。

郵便の休配(日曜、祝日)を考慮あわせて早目に送付してください。

※掲載ずみの原稿は毎月の三河アララギ誌と共に返送しますので、返信用封筒は不用です。

原稿の送り先

東京都北区王子本町一の二六の六A
〒一一四一〇〇二二 今泉由利

※原稿用紙は、二百字詰(20字×10行)を使用し、文字はわかりやすく楷書で濃く大きく書いて下さい。

編集後記

▽平成二十五年新年号をお届けします。

三河アララギは、発刊以来六十年目を迎えます。長く続けてこられたことを誇りに思います。先師の方々のたゆまぬ努力と情熱のたまものと思います。

気持ちを伝える手段や方法は、昔とくらべ大きく変化してきている現在ですが、かけがえのない日本語を大切に、短歌への思いは、ずっと変わらず持ち続けていきたいものです。

▽二年を終えるにあたって、長い間三河アララギで共に学び、支えて下さった今は亡き人々を偲び、自らを反省する良い機会でもあると思います。

会員の皆さま、良いお年をお迎え下さい。
(山口)

※年賀広告を掲載しました。

二千円をお送り下さい。

三河アララギ規定

◇「三河アララギ」に短歌を寄稿する者は、「三河アララギ」会員であることを必要とする。

◇規定の会費を送金すれば、すぐに会員になることができます。

◇会員には毎月歌誌「三河アララギ」を送付する。

◇会費は、平成十年一月一日より、半ヶ年分一万円、一ヶ年分二万円の前納された。ただし、購読会員は、半ヶ年分二万円、一ヶ年分四万円とする。

◇会員は、住所変更の際は、すみやかに通知せられたい。退会の際も同様のために連絡せられたい。なお、退会の際の既納会費は、返戻しない。

◇会員は、発行所開催の諸会合に自由出席することができる。

◇会員は、短歌・その他論文・随筆等を送稿することができる。毎月一回一日締切り厳守。なお原稿は一切返却しない。ただし返送希望者は返信用封筒の同封があればお返しします。

平成二十四年十二月二十五日印刷 第六十巻 第一号
平成二十五年一月一日発行 定価 六 百 円

編集部

岡本 八千代・小野 可南子・夏目 勝弘
平松 裕子・山口 千恵子

発行人

今泉 由利

発行所

三河アララギ会
豊川市 御津町 御馬 西 三 七
TEL (〇五三三)七五二〇〇九
振替口座 〇〇八三〇一六 五六三九
Email yuri88@cronos.ocn.ne.jp
Homepage <http://maizumityuri.jp/>

印刷所

株式会社 桜 創 美